

舞 とうん

VOL 83

2005.1



アングル

宮崎県五ヶ瀬町にみる住民主導のまちづくり

(株)地域振興研究所代表取締役 須川 一幸 …… 1

⑧⑨ 「地域文化でまちづくり」～市町村合併を超えて～

水軍の歴史を活かしたまちづくり	宮窪町／渡辺 範之 …… 2
砥部・里。アート讃	砥部町／矢野 徹志 …… 4
新居浜のオープンミュージアム戦略	新居浜市／森賀 盾雄 …… 6
宇和島圏域と伊達文化	宇和島市／二宮 一郎 …… 8
文化となった優しさ	小山田憲正 …… 10

キラリ光るまち

遠野の伝統文化を活かしたまちづくり 岩手県遠野市／菊池 新一 …… 12

論談ーまちづくりー

文化遺産の転換点、日本の旅の転換点 京都府立大学／宗田 好史 …… 14

若者とまちづくり

第三回 若者と人づくり 双海町／若松 進一 …… 16

トークナウ 地域を「学び舎」に 愛媛大学地域創生研究センター／吉村 和広 …… 18
地域と国際協力 四国NGOネットワーク／竹内よし子 …… 19

媛のかわら版

おイネさんドイツへ行く (VOL. 1) 松山市／戒田 節子 …… 20

MY TOWN うおっちゃんぐ 歩き目デス&足ラテス

ヴォーリス現る!?! ～八幡浜日土 清水病院～ 岡崎 直司 …… 22

近代化遺産活用フォーラム開催報告

梅村 裕治 …… 24

研究員レポート

伝説のタヌキのまちづくり	鵜野 大作 …… 26
「港の美術館」リニューアル事業に参加して	梅村 裕治 …… 27
「楽市楽座」で商店街の活性化!	清水 和繁 …… 28

information センターからのお知らせ …… 29

媛のくにフラッシュ …… 30

特集

「地域文化でまちづくり」

市町村合併を超えて

今年の舞たうんは『地域資源』を年間テーマにして特集を組んでいます。今回は、その三回目。水軍、砥部焼き、銅山、遍路、伊達文化等、それぞれの地域に受け継がれてきた「地域文化」によるまちづくりの取組みや、その可能性に焦点を当ててみました。

今は、まさに市町村合併の時期。今回取り上げた地域文化は、どれも、旧市町村の枠を超えて広がる文化。合併後の市町村を繋ぐ精神的紐帯になる可能性を秘めています。また、遍路文化にも、四国を繋ぐ絆の一つになってほしいと願っています。

県外では、民話で有名な遠野を取り上げました。今回の取材で訪れた遠野は、地域のアイデンティティを大切にし、誇りを持った「まち」でした。みなさんの地域のアイデンティティは何ですか? 誇りは何ですか? (編集子 ぬ)

表紙の言葉

新居浜市に在学中、クルスの約半分程は住友に携わる家庭でした。校区に杜宅もあり、鉄工関係も多い、工業都市を味わいました。

残念な事に、当時は鉾山発掘場までは行く用事もなかった。マイントピア別子や、別子銅山記念館が出来、その全貌を見て住友の偉大な存在を知りました。

山深く、美しい煉瓦作りの発電所、鉾山跡、鉄道跡などが、山並みに残されます。

柳原あや子





宮崎県五ヶ瀬町にみる

住民主導のまちづくり

(株)地域振興研究所 代表取締役

(地域おこしプロデューサー)

須川 一幸

市民自らが企画する。具体的に実行する。

実行しながら検証する。そして、反省し試行錯誤しながら前進する。まちづくりの流れは、シンボリックな施設建設や一過性のイベント展開の時代から、地域の総合的な魅力で勝負する時代に変化してきた。その担い手は「人」である。まちづくりへの住民参加の在り方、枠組みをどのように作るかが鍵となり、住民自らが企画から実施まで行う時代が到来し、「住民参加の時代」さらに「住民活動展開の時代」へと突入している。地域活性化には、

市民主導で活性化策を立案・推進することが必要と言われて久しい。自助努力の必要性を再確認しているが、いつの間にか公の支援策ありきに慣れてしまった地域にとって、自助努力の考え方を再び浸透させることは、一朝一夕ではなし得ない。

住民自治を実践している宮崎県五ヶ瀬町桑野内地区。まず自分たちでやる。やれないことを役場に依頼する。(ここ)まで自分たちが

やるから、残りを役場にお願したい。というスタイル(合併をせずに自らの力で町を守る・良くする・将来に残すことを『継続的にそこで暮らす』目標として自分たちにできることは何かを実践している地域。若者が増えつつある。福岡との交流事業で一人嫁いで来る。若者が地元誇りと自信を持ち、地元に残る決心をしている。結婚も今年三組、来年二組が決定している。イベントの時に子供たちが賑やかに遊びまわっている姿は少子高齢化の過疎地域とは思えない。もう生き返った(再生、再興した)町と言えるのではないだろうか。ソフト事業だけで十年間、地域住民全員でできることを一人の落ちこぼれも出さずに地域振興している事例だ。手段はグリーン・ツーリズム「夕日の里づくり」の実践。

共同参画の精神を県道沿道の草刈りに見ることが出来る。七月の草刈りもひと夏が経過すると、再び草が生い茂ってしまう。「夕陽の里フェスタ」の参加者にきれいな道路を通っ

てもらったため、延長二十五kmにわたる沿道の草刈りが、地域内からの呼びかけにより、沿道全地区できれいに行われた。草刈りはその後毎年継続され、狭隘で離合困難な箇所もある県道の整備が行われることとなった。共同で課題に取り組む伝統が、都市農村交流との相乗効果をもたらした。

これまでの夕日の里の取り組みの中で、ソフトを重視し「開発しなければならぬのは、人の意識である」という考えが浸透していた。当初はグリーン・ツーリズムに否定的であった人も、やがて自らのこととして「夕日の里」を支援する。この十年間に何の取り組みも行わなかったら、人々の意識がここまで変わることはなかった。

夕日の里の取り組みでは、自助努力の考え方が貫かれている。自力でする場合、可能な範囲は限られてくる。自らが担い、自分のリスクの範囲内で、身の丈の事業を企画する。フェスタの主体になれなくても、さまざまな形で参画できる。やれる範囲内で、役割を持つこともできるのである。

「役場が自分たちに何かをしてくれるのではなく、自分たちが地域のために何が出来るかを考え実践しよう」これが五ヶ瀬町の市民参加の基本である。

水軍の歴史を活かした町づくり

NPO法人能島の里を発展させる会の誕生まで！



宮窪町
潮流美術館実現計画書提案者

渡辺 範之



はじめに

当町は瀬戸内海のほぼ中心部に位置する面積一八・三七平方km。人口は三千七百余人の過疎の町である。産業は漁業・石材業・農業が主であるが「しまなみ海道」が開通してから「観光産業」の方向へと進み出している。これは「しまなみ海道開通や市町村合併」という時代背景もあるが、地域住民の努力によるもの大きい。

水軍ふるさと会の活動

昭和六十二年（一九八七）に町おこしグループ「水軍ふるさと会」が誕生した。当時は町おこしブームもあって、町の過疎に危機感を持った三十歳代の有志十名の自主活動である。

当会は、町おこしの定番である一村一品運動からイベント事業へと活動を広げて行った。そして経験を積んで運営組織を近隣の五町に広げ、大きなイベントへと取り組んだ。それはNHKの大河ドラマを誘致すれば地域が潤う事例を、この地域で実施することであった。五年の活動期間を設けて、村上水軍を取り上げてもらうために「はがきの署名活動」を展開した。映画興行で観客を寄せ、資金と

署名ハガキを集め、NHK大河ドラマ担当者に嘆願した。このときの大河ドラマ担当者の考えは「みんなの思いよりも時代背景が重要であり、当時の風景・海賊の歴史・女性の登場等が必要。」であった。このあと五町持ち回りで歴史の勉強会を行った。このことで宮窪に古くから伝わり、廃れていた和船競争に価値が見出され「水軍レース」として復活したのである。大河ドラマの誘致活動は期限の五年が過ぎて、村上水軍のドラマ誘致は失敗したが、水軍に関係する毛利元就がドラマ化されたのである。

三町主催の水軍レースは今年で十四回を迎えチームも八十七チームと選手だけでも千人を超す大イベントになった。当初に目標とした日本一の水軍レースにするため、PR活動として「村上水軍厳島の戦いへの道」を実施した。これは厳島が世界文化遺産に認定されたのを祝い、昔の海賊の厳島合戦の再現として実施したのである。タイミングとしてNHKの大河ドラマが厳島合戦の放映を控えてい



大イベントに成長した水軍レース

た。それで水軍の和船二隻の櫓を押して、一泊二日九十kmの海の旅。目的地は厳島の大鳥居。そして厳島神社で口上を云って、神殿の高舞台で太鼓・舞と宮窪水軍文化を披露する前代未聞のイベントを実施したのである。



潮流体験

水軍レース効果によって、町内では歴史を生かした町おこしの認識が一段と高まり、水軍博物館の建設・潮流美術館構想へと発展して来たと云っても過言ではない。そして十七年間続いた水軍ふるさと会は役目を終え今年(二〇〇四年)解散した。

水産研究会の活動

平成八年(一九九六)水産研究会は水軍ふるさと会より九年遅れで誕生した。会員は漁業に携わる若者で結成され海の環境を守ることから取り組み、そのうち漁師市をはじめた。これが人気を呼んで町外から多数の人が集まるようになった。このとき漁師市のイベントとして能島観光船(潮流体験)がはじめられた。訪れる人に潮流で浄化された綺麗な海と海賊の

歴史を自慢したかったのである。過去に能島の潮流の魅力を歌人吉井勇が「ますらおの 雄こころもちて 能島なる 荒神瀬戸の 潮鳴りを聞く」と詠っている。今までの宮窪瀬戸は潮流の速いことで恐ろしい海のイメージがあった。その潮流が人々に感動を与え、怖さの中で安全を確保することで、癒しの場所として観光客の人気となっている。

海賊時代の農作物を作る会の活動

平成十四年(二〇〇二)海賊時代の農作物を作る会は水軍ふるさと会より十五年遅れで誕生した。時代も健康ブームで無農薬野菜が注目されていた。かねてから無農薬野菜に興味を抱いていた有志が海賊時代の農法によって現代のヒノヒカリの稲を植えて作った。そして心あるものに呼びかけ共同で収穫し、それをみんなで食したところ大変美味しいので本格的に運営することになった。将来は商品価値のある安全な野菜「海賊時代の農作物」を地域に広げ



海賊時代の農作物を作る会

ることを考えた。それで各グループ有志に呼びかけたことから自

然・歴史・産業・観光と総合的に捉えて、地域再生化計画提出資料として「潮流美術館実現計画書」が生まれたのである。

おわりに

当町は愛媛県より能島水軍の里に指定されたのが昭和四十八年である。それで住民は能島水軍の里の役割を考え意識するようになった。そんな時代の背景も手伝って、水軍ふるさと会が誕生し、海賊の歴史を生かした町づくりの方向に歩み出したのである。それが個々のグループでは活動が難しい今日、協働の時代になってきた。それで各グループ有志の活動をまとめた潮流美術館計画構想を実現するため、NPO法人(認証申請中)を立ち上げたのである。この法人は「NPO法人能島の里を発展させる会」と称して、瀬戸内海の自然保全・活用を広め、人と自然との調和に努め、文化的・精神的・経済的に豊かな確立を図ることを目的としている。

活動は瀬戸内の原風景が残っている能島(国指定史跡)から、海賊の軌跡の範囲である。海賊の歴史を活かすことは、生活の便利だけを求めるのではなく、瀬戸内海の自然保護による共生を考えているのである。

砥部・里。アート讃

—砥部が好き。里が好き。
里がアートで磨かれたら、もっと好き—



砥部町
NPO法人とべ・TOBE
理事長 矢野 徹志



始まりは里の会だった

昭和五十七年、窯元、デザイナー、商店主等が集まって「里の会」が発足する。自称「砥部大好き人間」たちの「里」のあれこれを語る会だった。すでに砥部焼きは国の伝統工芸指定（昭和五十一年）を受け、翌年は伝統産業都市認定を受けて、砥部磁器創業二百年祭を契機に、飛躍的に里の整備が進んで、陶郷は活況を呈していた。

里の会の集まりに、会員の山本典男が、永年の砥部焼の歴史をまとめた手描き原稿を携えてきた。貴重な論考だった。この時、それを活字本として発刊する方向に話が急展開。編集発行人はもちろん里の会。編集作業に取り組んで「砥部磁器史（上）」が日の目をみる。発刊記念祝賀用盃は、砥部焼のルーツを探る野焼きによって、手づくり製作。話題を呼んで、パーティー参加者は三百名を超え、五百部限定の冊子が一挙にさばけた。

以後、夢談義が回を重ねる。「里を演出して、土壁や石畳、アザミや野の花咲く丘、小さな森の中に芸術村や工房がある里に。」「湯布院みたいじゃネヤ。」「それなら温泉もいるゾ」誰かがはやし立てた。



アートの里づくり会議の
拠点となった里山房

後で砥部温泉も誕生するが、砥部焼祭もまだ開かれてなかった。里の会時代は「アートの里」の夢を育んだ。

アートの里づくり会議結成

平成元年ふるさと創生一億円の使い道を提案する会として「里の会」を改組。アートの里づくり会議が結成される。

町づくり審議会に里の景観を生かした芸術村の建設を提案。町委員側は「アートタウン・砥部」を提出。砥部の持ち味は「里」が残ること。手仕事、四季、手のひらサイズ、そのイメージは「里」にこそふさわしい。「アート」には感動、美、独創、高級を連想させる力がある。里もアートも二十一世紀の「心」の時代のキーワードだ。「タウン派」を説得し、ボク等の提案も入れる形で、町は「アート

の里」宣言。この時、砥部焼を核として伝統文化と、新しい芸術文化が融合する香り高い「アートの里づくり」が一步踏み出した。

その手始めは、官民共同による「アートの里づくりフォーラム」の開催。第一回はデザイナーの福田繁雄氏を招く。第二回は湯布院から中谷健太郎氏を招いて「由布院の旗手たちと砥部を語る会。」湯布院との交流が始まる。

以後、アートの里にふさわしい「こと」と「もの」を求めて、積極的に町づくりに参画。地域資源を探索お宝探検。情報誌の発刊。アートの里写生大会等を実施。そのお宝探して、停止したままの川登の水車に出会う。所有者佐川巖さんの協力で、「水車復活祭」が実現。四半世紀ぶりに水車が動いた。(数ヵ月後、土砂堆積によって、再び水車は停止する。)

この頃を機に里づくり会議の動きが低迷期に入る。里の会から十五年の月日が流れていた。それでも町文化協会等への企画提案。「インドカタカリ舞踏劇」「モンゴル民族音楽団」の招致を通じて住民の芸術文化に触れる機会を提供し続けてきた。

一方で、七年前に立ち上げた私設ギャラリー・アートの発着拠点「里山房」に

会議の事務局を置いて、「町が美術館」を具体化するための企画、「美と技の祭典」事業に連動。毎年「とべ国際アート展」を開催してきている。

NPO法人とべ・TOBEの発足

そこへ、松山か広田かに揺れた市町村合併問題、どこと合併するにせよ、地域発の文化拠点の存在が不可欠。その事を巡ってアートの里づくり会議の再編と活性化が話題になりはじめる。

「これからはNPOの時代。好き勝手集団では地域説得が困難」盟友の岡本保孝、日野健三らと日夜議論。結果、アートの里づくり会議時代の、理念と活動を継承する形で、NPO法人とべ・TOBEを申請。十六年一月末、県の承認を受ける。「砥部よ翔べ！国際化の中のTO



坪内邸観月の夕
地元住民100を超える人が集まった

BE。アートで地域活性化に貢献。」そんな思いがネーミングに込められた。

砥部陶街道五十三次を構想する

住民投票の末、広田との小さな合併を選択。その時ひらめいたのが「陶街道」ルート。里の会、アートの里づくり会議時代に出会っていた川登水車。築後百五十坪の坪内邸、川登陶石。広田の陶石採場。道の駅第一、第二陶芸舎。神の森工芸体験館等々が、一連のルートの上で一挙につながった。それに伝統産業会館、陶租が丘へと連なる陶を巡る街道だ。

その陶街道構想を、合併協主催の「小さくともキラリと光る町づくり」シンポジウムで発案する。

一方で「陶街道」の「本陣」と目される坪内家の保存と活用運動を展開。かつてこの地区には二十四基も水車が集結し、川底には陶石が露出する。水車と古民家を再生して「陶街道」のメインに位置付ける。坪内家の賛同を得て、早速、地区老人会の全面協力による「坪内家清掃ボランティア」「坪内邸観月の夕」「水車の里蛭まつり」を開催。多くの地域住民が集った。今後の合併後の町づくりに、それをどう生かしていくか、NPOの取り組みが始まったばかりである。

新居浜のオープンミュージアム戦略



新居浜市
政府認定観光カリスマ

森賀 盾雄

(新居浜市経済部総括次長)



産業遺産活用運動を始め二十年、やっと新居浜市が全国のモデル的な町になってきた。そうして、今

「産業遺産モデル都市」から「ジオ・ミュージアム都市」へ

「世界遺産都市」から「世界知産都市」

へ・・・と向かいつつある。

現在、新居浜の産業遺産は、海拔千二百mの「住友のインカ・森になった街」と称される旧別子地区、海拔七百mの「日本のマチュピチュ」と称される東平地区から、山麓地区における「遺産の破壊と保存」の相剋期は終わりとあり、今後は「まち中地区」と行政区域を別とする「海上都市」と称される四阪島地区で同様の相剋期が始まろうとしている。

市民の自発的学習活動も「ボランティアガイド学習講座」の継続的開催、ビジターへのガイド実践の積み重ね、産業遺産関連の新たな資料発掘、高校生のインターネットのコンテンツとしての産業遺産の取り上げ活動、小中学校の総合的学習での取り上げ、生涯学習講座などにより、急速に活発化してきている。これらはすべて「生きた歴史の学習」であり、「愉しみながら、自らの内発的なものに動かされての学習」活動である。地域資源の学習を通じた「新たな知の世界との出会

い」といつてもいいだろう。

二〇〇〇年、大阪での国際ミュージアムシンポジウムで、私は「新居浜市は、産業遺産モデル都市からジオ・ミュージアム都市への進化を目指す」と宣言した。それは、無数の産業遺産の集積がある、ということとは「無数の自然との角逐」があった、ということ意識してのことである。つまり、別子銅山の銅鉱床が出来たのが約一億年前ということは、「産業遺産としてはたかだか三百十数年」であり、「自然・環境としては一億年」という視野にならざるを得ないということである。産業遺産を切り口に学習を進めると、いつの間にか「都市学」や「気象学」「土木学」「化学」「機械工学」「建築学」「環境学」「林学」「治水学」「地質学」に直面する。ジオ・ミュージアム都市・市・新居浜・・・である。

さて、学習資源満載の都市・新居浜には世界遺産級の産業遺産が集積しているが、世界遺産を目指しながらも、さらに学習活動の積極的側面から戦略目標を考えると、次代のキーワードは「世界知産都市」ということになるだろう。工業化社会の次なる時代は知識社会だと言われている。地域文化が、その地域の単なる



銅の道ウォーキング 2001

アクセサリでなく、地域そのものの存立を保証する根元的な動脈（地下水脈）と連結している時代の登場である。遺産を切り口として知識を学び、交流し、知識を与え合い、地域全体が新たな生産のため（労働のため）の「知を生み出す」都市である。ミュージアム産業から「ものづくり」産業まで視野に入れた、また、コミュニティ・ビジネスからグローバル・ビジネスまで含めての地域生産機能の創出・展開と結びついた「知の生産都市」である。

新居浜市は、市民自らが、地域資源を活かして、学び、ビジターと、市民同志と、世代間で、相互学習を始めている。「世界知産都市」に向けて、ようやく地域自ら「知の編集」を始めた、ということであるのか。しかしながら、「知に向かう姿勢」の成熟が肝要である。市民ガイドが市民学芸員となることも望ましいことではあるが、「資源探しをやつてそれを自己顕示し、自己満足に陥ったり」「立派な知識を見せたり、教え込んだり」するのが、知のミュージアムではない。市民も、地域も、あらゆる知の世界への通路を開き、人間の知の成長力への限りない信頼性を持たなければならぬ。「知の辺境（無知との境目）」つまり、「内なる知の辺境」と「外なる知の辺境」を、市民も、地域も、絶えず自覚しようとする



マイントピア別子東平地区での銅工芸体験教室



産業遺産地域視察 2003

るのが、「知に向かう姿勢」の成熟の保障である。ビジターを受け入れる側が、ビジターと共にコミュニケーションを進化（深化）させ、共に「知のミュージアム・コンテンツ」を創り出すことがミュージアムづくりにおける「知の編集」である。

「世界知産都市」への道は、地域資源を入り口として、市民と地域が、「知の辺境」を自覚しつつ、「知の編集」を行いながら、「知の生産能力」を高めることにより到達していけるのだろう。

宇和島圏域と伊達文化



宇和島市
宇和島市立伊達博物館
学芸員 二宮 一郎



地名宇和島と祭礼に見る地域の一体感

宇和島という地名は、元和年間に板島を宇和島と改めたことにはじまる。宇和郡の「宇和」と板島の「島」とを合わせて「宇和島」とし、宇和郡の中心という意味とされている。父政宗が「千代」の文字を「仙台」に改めたように秀宗が新地に赴き藩主として新藩創設に臨む思いを託したものとも考えられる。司馬遼太郎氏（以下、司馬氏と記述す）は、初代秀宗の入部の時、侍を従え、家族や御用商人たちも奥州から宇和島に移住して来た。その人数は二千人以上ではないかと推察する。そのため宇和島には、奥州の言葉や祭りをはじめ、民俗や風習もやって来たと記されている。南予地方には、その名残が残っている。

祭礼は、地域に根ざし人々の営みのなかに密接に結びついた存在であり、地域住民の一体感を再認識する機会でもある。郷土宇和島・宇和島藩の祭礼を語るとき、牛鬼と鹿踊が強くうかんでくる。特に「鹿踊」は旧宇和島藩・吉田藩を中心に南予一円の祭礼で行われている民俗芸能であり、その起源は仙台藩の八幡町の鹿踊（米沢から政宗に随伴した形で仙台に移った可能性がある）が移入されたものと考えられる。今でも鹿踊りをしている地域に

は、ひとつの同一圏域と認識される一体感が生き続けている。

宇和島藩の藩政概観

政宗以来の名家である伊達家の統治（藩政）は、司馬氏によると「農民に対するとりたてなど、二百数十年を均していえば他藩に比してきびしくはない。藩政はほぼ安定し、宇和島らしい庶民文化を熟成させた点、江戸期の諸藩の政治のなかでも出色といっている。江戸末期のある時期、蘭学は宇和島といわれた時があった。新しい学問の花がひらくには、それなりの経済の裏打ちが必要であつたろう。新学問の育成というのは大変物入りなものであつた。この藩の財政が農業にのみ依存せず、小藩なりの規模で殖産興業と商品経済に力を入れていたことをその裏側の実情として見のがすことはできない。」とされている。

司馬遼太郎氏の提言

司馬氏は、宇和島の将来について「夢のような机上プラン」と称し、提言された。「宇和島は学問の盛んなところで、非常に密度の濃い文化（文化とはカステラム、つまり暮らしのやり方）を持ったところであり、世間の誰もが尊敬するまちで文化をクリエイトしないのは、おかしいわけです」と位置づけ、「独創的にも

のを考えないと、宇和島は衰退してしまう。陶芸の村をつくるとか、ガラス工芸の村をつくるとかして、新たに美術工芸を興してはどうでしょう。宇和島は、そういうことをおはじめになるには、雰囲気の良いまちなんです。何か活路を開かないと、ここは衰弱します。活路を開くためには、宇和島の人が自分の頭で考えカスタムを失わないということが大事です。それが宇和島の気分の良さなので、そこから：そして宇和島の文化がさらに照り輝くような方法を考えないといけませんね」とし、「文化を積極的に取り入れながら、自分の頭でものを考えましょうとお伝えしたかったわけです」と考えをまとめられている。今一度、司馬氏の歴史観に学ぶことが大切では、事実今活躍している企業などは、負をプラスに転じる発想において活躍している。

宇和郡と宇和島圏の歩みあらまし

郡名の初見は、『日本書紀』持統天皇五年（六九一）七月の記事に見られる。宇和郡の政治・経済の中心は、古くは宇和であったが、文祿四年（一五九五）藤堂高虎が宇和郡の領主となり、本城を板島丸串城として本格的な築城と城下町を造ることで、宇和島（旧板島）が中心となった。慶長十九年（一六一四）徳川氏

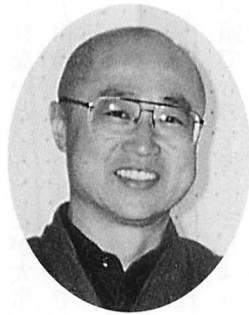
より大坂冬の陣に父伊達政宗と出陣した秀宗が宇和郡十萬石に封じられ、途中転封されることなく明治四年（一八七二）廃藩置県までいたる。廃藩置県の断行に伴い旧藩領を管下とする宇和島県と改められ、府県の大規模な整理統合により、宇和島・吉田・大洲・新谷（いずれも旧藩）の四県が廃止統合され、改めて宇和島県となり、役所が宇和島に置かれた。同五年に神山県と改称された。同六年に石鉄県と神山県を合併させ一県とし愛媛県と名づけられ、役所は松山に置かれた。明治十一年（一八七八）政府は郡区町村編制法の発布により、宇和郡は東・西・南・北の四郡に分かれ、各郡役所が卯之町・八幡浜・城辺・宇和島に置かれた。郡区町村編制法の意図は、郡・町村の支配機構の強化にあった。この頃の九代伊達宗徳の宇和四郡士民中に宛ての手紙が残っており、議員選挙に於いて我旧藩地（九代宗徳が廃藩置県まで宇和島藩を統治していた）の人には公平の意見を持ち法律道徳に正し国家の為地方の為適当の人選を希望する旨が記されている。このことは、取りも直さず明治以後も伊達氏が宇和島の政治などに関与していた一端を知ることができる。同二十三年に市制・町村制が施行され、宇和島町となっ

た。大正十年（一九二一）に宇和島町は市制施行、市民が大提灯行列を行った。その折の祝賀の歌の中に「伊達氏善政世々を経て、町の礎定りぬ、今文明の大御代は…」という歌詞があった。

郷土の「誇り」

筆者は、史料保存・利用体制の確立と文書館学としてのより高度な体系化が出来るように史料整理管理の専門職（アーキビスト）の養成研修（国文学研究資料館史料館（国立史料館）による）を終了し、さらに国立公文書館での研修を受け、国立等の各機関を視察研究して、より充実した将来的取り組みに努めている。そして、文書館学の重要な原則である「現地保存の法則」（文書は、その文書のつくられた地で保存する）を大切に守るよう活動している。このことはその地域を愛し史料を後世に正しく保存し伝えんとするものである。幸い郷土宇和島の宇和島藩伊達家文書は、全国でも屈指の貴重な内容レベルの高い約三万点を超えるものが伝えられてきており、郷土の「誇り」ともいえる史料が現存している。以上、とりとめなく述べさせていだいたことが、何か郷土にとってのプラスともなることがあるれば幸いと考えてる。

文化となった優しさ



四国へんろ道文化世界遺産化の会

代表 小山田 憲正

私が、町おこしの集まりに初参加したのが十数年前。その頃各地で一村一品運動や、古い町並みや景観を生かした町づくりが熱っぽく語られていました。

先進地の美しく昔らしく作り直された町並みに、街からの人が溢れ、田舎の若者は、仕事を都会に求める事なく、ふる

里で生活が出来るようになっていました。

そのような話を聞き、私も玉川町内でつくる「町づくり研究会 源流」の仲間と共に町内の名所さがしに出掛けました。ふる里の再発見の作業でもあったが、もっと外からの人を集めることが出来たらとの思いも強かった。三十ヶ所の名所を選び地図を作り上げた。我々、仲間うちで楽しく汗を流した結果だが、地図を片手にその名所を訪ねる人はいない。

元々、玉川町は日本のどこにでもある田舎。農業と林業で暮らし、五、六十戸程の集落が町内のあちこちに散らばっている変わり映えのしない町だったのです。それでも我が町の自慢を言おう。そんな心は、親の子供自慢に似て非難されることではない。私たちはただ、その何も無いという所で町づくりをしていこう。それが私達の町づくりの原点です。

町づくりの目的とは

山に囲まれ、海で区切られて暮らす人々。私たちの町づくりの求めている先は、田舎に都会の暮らしをつくることだろうか。隣り近所が競い合ってお客を呼び込むことだろうか。生活の場、遊びの場を提供してくれた自然は、都会的生活を始めた私たちにとって、不自由なもの

に変わっていました。

農作業も機械化で共同作業をする必要もなく、共同体を実感する祭りやさまざまな家庭サービスの日となっていました。かつては豊かな幸を届けてくれた里山は、人が入ることを拒むまでに荒れてしまった。私たちは、ここでどんな生活を求めようとしているのだろうか。

仲間と話し合う中で、竹林のすさまじい勢いが、山の荒廃の一因であることを知った。

かつては炭焼の里でもあった我が町で、炭窯を見かけることもなかった。小学校の子供達と一緒に炭窯を築き、見たこともない竹炭を創り出した。消臭材として商品化した。それ以降、全国的に竹炭ブームが作り出された。

源流の活動が、その収益で、山に植樹する活動、川の里親の活動と広がり、平成十六年四月には環境大臣表彰の栄に浴した。

だが私たちの活動は、ほんのささやかな活動ではありません。ただ、そこに時代の先を読む生き方ではなく、私たちは足元を見ていたことは、間違いのないことだと思っています。

さて、日本各地から毎年、何十万もの人々がお四国にやってきます。私もお四

国にご縁を戴いて早や二十六年になりました。始めは千三百五十年の歴史をもつ古刹に、険しい山道と町から隔絶された生活に、驚かされていました。今では、それほど良い距離と感じて、猪やきつねに出会うことに喜びを覚えています。そのような中で、私が四国のへんろ道を世界遺産へと提唱し始めて七十八年の時が流れました。

なぜへんろ道文化を世界遺産に

当時、癒しという言葉は聞くこともなく、皆さんの間ではお遍路さんとは、熱心な大師信者という意識しかありませんでした。その人達に、歩く道を世界遺産にどうですかと話すと、誰もが、「そうだ!」とは言いません。「世界遺産の条件を勉強したか。まず無理だな。」そのような意見も聞かれる中で活動でした。しかし多くの人々と出会い、励ましを受ける中で運動を続けることが出来ました。

『癒しの国、四国』と『癒し』が今、四国の枕ことばとなっています。大学では、遍路を授業に取り入れる学校もいくつか現れてきました。体験した学生は、山道で足にマメをこしらえながらも、感動を口にするのです。ただの何の変哲もない四国の山道にです。千四百キロと続

く遍路道、決してきれいに掃除されている訳ではありません。ところによれば、心ない人のゴミ捨て場と化しているところもあるようです。それでも千四百キロの道は、千年以上も途切れることもなく続いているのです。大雨で道が流され、台風で木が倒れても、すぐに通ることが出来ます。誰からも言われることなく、どこからも援助を受けることなく、地域の人の暖かい心に道は支えられていたのです。

共に受け入れ、共に生きる世界を

今、世界は、テロとの戦いと声高に言う一方で、これは聖戦だと宣言している人々もいます。

お四国に参られるお遍路さんも実にさまざまです。年齢も性別も宗教も目的も、

それぞれ違います。彼らは千四百キロの道のりを、寺々を巡り通した後、また、いつもの生活にもどっていきます。何年か後、大きな離別があった時、悲しみに心が萎えてしまいそうな時、ふたたび四国を訪れてきます。そこには一人のお遍路として分け隔てなく受け入れてくれる暖かな四国の人々がいます。

今こそ時代は、伝え遺すべきものは、物でなくところへと変わらなくては強く思います。

文化としての町づくり。地球のどこでも高層ビルが建ち並び、同じ映画を観て同じ服装で歩いている姿、想像するだけで何とも味気ない世界でしょう。百の町に百の文化、百の国には百の価値。お四国にやってくるお遍路に共感を覚え、自然とお接待をしているお四国の人々。

優しさが文化として息づいている地域が、何所にあるのでしょうか。

そんな地域が世界中に広がることを夢見て、息の長い、へんろ道文化世界遺産化の運動を続けて行きます。



「四国へんろの道文化世界遺産化の会」の設立発起人会



大洲市で開催したフォーラムのひとコマ

～岩手県遠野市～

遠野の伝統文化を活かしたまちづくり



遠野市総合産業振興センター

所長 菊池 新一

はじめに

遠野は柳田國男の「遠野物語」と、「民話のふるさと」として全国に知られたまちである。岩手県のやや東側を南北に走る北上高地の南端にぽっかりと平地が現れる。六百六十平方キロメートルと、琵琶湖に匹敵する広大な面積を有し、なだらかな山々に囲まれた盆地が遠野である。基幹産業は農業で、人口約二万八千人の典型的な中山間農業地帯である。昔からの伝統文化をまちづくりに活かし、最近は、「どぶろく特区」で全国から注目を浴びている。また、都会からの移住者

が多く、グリーン・ツーリズムの先進地としても知られている。

遠野の民話（昔話）を活かしたまちづくり

遠野に伝わる昔話は三百を超える。語り部は十数人いる。そのほかにも、勉強会の「いろり火の会」のメンバー約二十人、小学生など子供たちも頑張って伝承活動を行っている。

遠野では、こういった語り手を育てる場をできるだけ多くつくるように努めている。

遠野昔話村では、観光客を対象に毎日

昔話を聞かせている。そこには六人の語り部が登録して交代で出演している。

「いろり火の会」のメンバーは勉強を兼ね、これも観光客を対象に観光案内所の一室で何話かの昔話を無料で聞かせている。

そのほかにも毎年遠野昔話まつりが開催され、小学生の語り手も参加して大いに盛り上がる。そのほかにも伝承園や遠野ふるさと村などの観光施設では随時昔話が聞けるようにしている。遠野の人はよそに行くと昔話を所望されることが多いので、ひとつ二つ覚えておこうと思う



遠野昔話まつり風景

ている人は多い。

郷土芸能の復活

遠野の郷土芸能は、戦後、昭和四十年代まで衰退の一途であった。しかし、その後、かなりの復活を遂げている。

理由はいろいろ考えられるが、今年で三十二回を数える遠野祭りが大きな要因と思われる。

毎年九月中旬二日間、初日は市街地、二日目は神社で大々的に祭りが繰り広げられる。

そこには、五十を超える郷土芸能団体が出演する。町方の踊りは京都祇園ばやしに似た優雅な踊りの「遠野南部ばやし」、在方の踊りは勇壮な「しし踊り」や「神楽」など市民総出である。裏方も含め、のべ七、八千人の参加である。

毎年多くの観光客で賑わう。芸能団体にとってはまさに桧舞台である。

そのほかにも、どぶっこ（どぶろく）まつりや地域の小さな神社の祭りが年々盛んになり、学校や保育園でも伝承活動が活発で発表の場に事欠かない。

これらの活動が、地域コミュニティの活性化につながっており、各地域、競ってこのような活動が行われている。遠野の特徴は、ほとんどの団体が子供から老



どぶっこまつりの神楽の舞

人まで参加できる役割があることにある。

どぶろく特区と新時代への

チャレンジ

国は、特区、地域再生など地方の活性化のために矢継ぎ早に新しい施策を打ち出した。遠野はいち早く名乗りを上げた。「どぶろく特区」はまさに特区制度の象徴として全国に紹介された。

その反響はすさまじいものであった。観光客が大幅に増えた。なぜ「どぶろく」か。平成十二年から「どぶっこまつり」として市内二軒の造り酒屋の濁り酒で冬

場の観光客誘致のためのイベントを実施していた。本物が飲みたいという声が大きくなっていた。そのことがどぶろく特区へとつながった。

遠野のような中山間地は、厳しい農業情勢、企業誘致もままならず地域が疲弊していく。どこでも同じであろう。しかし、この状態を黙って見過ごすわけにはいかない。地域資源を活用し遠野らしいチャレンジを続けようというスピリットが遠野にはある。

おわりに

遠野の「まちづくり」に関わるものは無意識のうちに「遠野」というブランドを意識する。昔から伝わってきた「遠野らしさ」とは抽象的で一人一人微妙に違う思いではあるが、大筋では違わない。その違わないものが織りあって、すべての出来事がお互いに関連しあっているように回っているのだろう。自然と人間がちょうどよい加減で調和している。これからも遠野はこのスタイルで進んでいく。

文化遺産の転換点、日本の旅の転換点

～紀伊山地の霊場と参詣道の 世界遺産登録～

京都府立大学

宗田 好史



今年七月「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界文化遺産に登録された。豊かな山並みの奥深く守り続けられた数々の霊場、信仰の山々と熊野古道・大峰奥駈道など古くから巡礼・参詣道は地味で小さな文化財の集積であつたものがいきなり世界遺産となった。これまで文化財でなかった森林や河川、古道が、そして巡礼という無形の文化を世界が認知したのである。この新しいタイプの遺産は、文化財保護法が改正され、文化的景観が新たな文化財となった年を記念する登録であり、今後の文化財行政が無形の価値、伝統的な暮らしの中に守り伝えられた人々の心のあり様にその対象を展開しつつある象徴でもある。

巡礼は古代の旅の原型である。四国には空海ゆかりの四国八十八ヶ所霊場があり、今も年間三十万人が巡る四国遍路は日本を代表する巡礼路であり、世界的に見ても特徴的であると思う。その道筋には、寺ばかりか町並み・村並みが数多く残され、険しい山道には豊かな自然が、また美しい農地や森林の景色が守られている。そして遍路は今も耐えることがないばかりか、静かなブームが沸き起こりむしろ盛んである。なぜか多くの現代人

の心をとらえ、全国の数々の霊場と巡礼道を見直す上で重要な役割を果たしている。

その背景には旅の形の変化がある。団体旅行（マス・ツーリズム）ではなく、一人や小さなグループで回る巡礼の旅が広がった。それは、集団で行くお伊勢参り型でなく一人二人でいく遍路型へ、特定の地志向でなく途上の霊場巡回型へ、贅沢な宴会型でなく質素でありながら心の豊かさを求める精進型へと人々の旅の志向の変化である。知らず知らずの内に、伝統の遍路が新しい旅の形として再発見されているのかもしれない。

紀伊山地の霊場と参詣道は、自然崇拜を根底に信仰と道を対象とした文化遺産である。つまり人々の心の旅の原型を知ること、その文化的価値が理解できるものである。文化遺産の価値は本来モノではなくそれを見る人々の心の中にある。特に、霊場と参詣道は信仰をもって詣でる人々の心にはじめてその価値が生まれる。自然を尊び、祖先を敬う気持ちを参詣という形にして伝える文化遺産である。日常を離れ、参詣の旅に出ることで内面に投影される山々や社寺を愛でることを

繰り返しつつ守り伝えられてきた文化遺産が霊場と参詣道である。

紀伊山地の人々は、例えば熊野古道各所にある王子（祈りの場）で祈る人々の眼と心に映る紀伊山地の姿や暮らしの様子を徒に変えたくないと考えている。参詣の作法、巡礼を迎える村人の接待・結縁こそが、お堂や石畳以上に守り伝えたい文化遺産であるという。文化遺産を形としてとらえ、その物的保存中心であった文化財保護の世界を超え、無形の価値が保存の対象になる。法隆寺・姫路城で始まった日本の世界文化遺産登録は、十一年を経て大きく変わってきた。その背景

には世界中の人々の心の変化が、日本人の価値観の変容がある。その背景を理解した上で、信仰の心に映る紀伊山地の姿を文化遺産として保護する総合的な管理計画が考えられなければならない。

しかし、この文化遺産の価値を一般観光客に伝えるのは難しい。地元の人々が恐れるのは、一般観光客が古道を歩く巡礼者たちに向けるまなざしである。熊野古道・大峰奥駆道の世界遺産登録に際して、奈良県十津川村や和歌山県本宮町などの地元住民の間では今後増加する一般観光客にどう対処するかが議論されてきた。美術品や社寺城郭という遺産の形を

見ることに慣れた観光客にとって、この新しい世界文化遺産の価値は分かりにくいだろう。観光が日常に近い営みとなった今日、参詣の旅に出る人々はいても、彼らの心情を理解しようという豊かな想像力をもつその他の人々は少ないのかもしれない。その点、紀伊山地にも四国遍路にも、おせつたい、結縁を忘れずに巡礼を迎える人々の心がある。巡礼を迎える人々にはふるさとに対する思いがあり、その思いは地域の文化として高く評価される。その文化があるからこそ文化的景観が文化財となる。

今回の世界遺産登録は、文化のより深い精神的な部分に光を当てたことであり、ふるさとと旅のあり様をもう一度考え直すいい機会となった。その守護者である地域の人々に守られてこそその世界遺産である。その活用についても、それぞれの当事者の真摯な思いが中心に置かれなければならない。浅はかな観光振興ではない。地域の誇りが世界に発信される。心と心のふれあいが本来の観光の姿でもある。四国遍路を世界遺産にしようという取り組みには、深い地域文化への関心が込められているのだろう。



熊野古道

（和歌山県本宮町観光協会提供
本宮町在住 山下義朗さん 撮影）

若者と人づくり

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員 若松 進一

人づくり十年計画

まちづくりは人づくりであるとよく言われるが、時代を担う若者を育てることは容易なことではない。俗に五W一Hといわれるような何時、誰が、何処で、何を、どのようにと突き詰めて考えれば考えるほど、人づくりの奥行きや間口は深くて広い。島根県出身の竹下首相があるさと創生という名の基に全国の市町村に一律一億円を交付し、ばら蒔き行政と批判を浴びた話は余りにも有名だが、驚くことに全国にはこのふるさと創生資金を人づくりに当てた市町村は多く、その成果が期待された。しかし基本コンセプトのはっきりしない海外派遣などの事業は、結果を急ぐ人々の攻撃の標的となつて次第にその姿を消し、今は見る陰すらない市町村が多いのも周知の事実である。

双海町では、まちづくり元年と定めた昭和六十二年から、「人づくり十年計画」

に基づき一年に十粒、十年で百粒の種を育てて町内にばら撒くシード作戦を実践した。「金は全額出す、レポートは要らない」という当時としては斬新な遊び心的発想で実行した結果、おおよそ十年で百粒の種が育つてばら蒔かれ、町内各地のそれぞれの分野で活発な活動を展開している。

特に双海町の海外派遣はその目的地をアメリカ・ヨーロッパ・オーストラリアの三極を結んだトライアングルゾーンと定め、自らがテーマを設定してプログラム立案に参画するよう配慮したため、語学力の壁から比較的こうした派遣事業に乗りにくかった第一次産業に従事する若者も積極的に参加するようになり、第一次産業の振興にいささかなりとも役立っている。

最初の海外派遣生としてアメリカ十六日間の研修に参加したのは町内で農業を

営む清水壮一郎さんと岡本廣志さんである。彼ら二人はオレンジ自由化の嵐が吹き荒れる中で渡米し、水平農業といわれるアメリカから垂直農業である双海町の農業を見つめ直し多くのことを学んだ。帰国後彼らがレポートした「二人の青年アメリカ見聞録」という報告書には、異境の地で肌で感じた異文化ギャップが詳しく熱く記されているが、彼ら二人はこの報告書を持って町内の自治公民館や団体をくまなく回って、人づくりの必要性を説いてくれた。お陰で研修事業はその後軌道に乗って十八年後の現在まで続いている。

清水壮一郎さんは後に愛媛県果樹同志会の会長、岡本廣志さんは双海町議会の議長となつてそれぞれの立場で活躍して



いるが、当時を振り帰ればアメリカからコレクトコールで届いた「シアトルでは小学校二年生の子どもが英語で喋りよる」というジョークにも似た驚きの言葉は、かつて第十回総理府派遣青年の船の班長としてアメリカへ渡ったとき、「世界地図の真中に日本のない世界地図」を見て驚いた私のカルチャーショックと同じだと、当時を思い出しながら苦笑するのである。

二人が中心になって海外派遣研修に参加した仲間呼びかけて組織した、双海町海外派遣協会「創快塾」は今も自主的な活動を続け国際交流の一翼を担っているが、特に徴収した会費を集めて自らの力で海外派遣を行ったり外国人を招聘するなど、まちづくりへの貢献も忘れないことが頼もしい。

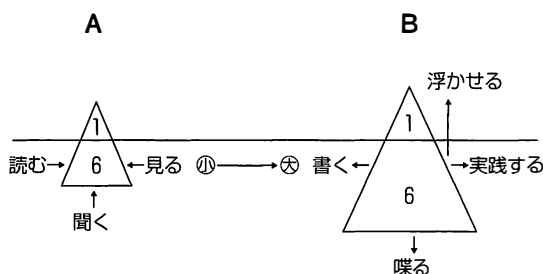
「可愛い子には旅をさせ」という古い諺があるように、人は若ければ若いほど孤独な旅であればあるほど旅先で多くのことを学ぶが、三位一体という名の基に人づくりの予算が削られ、目に見えない人づくりへの投資が姿を消しつつあることは返す返すも残念である。

氷山の一角からの学び

人はどのようにして自分の知識を習得するのだろうか考えた時、「氷の実験」

を思い出す。コップに水を入れ冷蔵庫から取り出した水を入れると、氷は少し浮いてその殆どが水中に沈んでいる。広辞苑という分厚い辞書で「氷山の一角」というページを捲ると、「氷山の一角とはおおよそ七分の一の浮いた部分をいう」と書いてある。ではキューブのような小さな氷も、北極海に浮ぶタイタニックを沈めたような大きな氷も同じかと尋ねてみると、塩分の濃度などの条件によって多少の差はあってもおよそその比率は変わらないという。

水を人間に例えると、母親の胎内から産み落とされた氷は読む、聞く、見るという三つの行動によって得た知識たるエネルギーを内蔵し続け、大きな氷たる人



潜在能力と顕在能力

間へと成長し続けるのだが、急激な成長は身体成長に比例するから十代、二十代を過ぎれば大きな成長は望めないのだ。人間の殆どは一生のうちで得た知識の見える部分、つまり七分の一の顕在能力しか使わず、残った七分の六の潜在能力は使わずに人生を終えるというから実にもったいない話である。人間の人間たる所以は氷と違いその努力によって潜在能力が顕在化することである。内蔵した知識を知恵にして役立たせるには読んだら書く、聞いたら喋る、見たら実践することが必要で、書く、喋る、実践の三つによって氷の不文律は一对六が二対五、三対四、時には四対三にもなって大きく花開くのだ。

振り返れば何処にでもある夕日を地域資源として生かされたのも、宇和島水産高校の実習船愛媛丸で十八歳の時に見た南太平洋の感動的な夕日残像であったし、青年の船日本丸で見たメキシコやハワイの夕日であった。

人は気づかないところで多くのことを学ぶが、学んだことを生かす術や、他人からの指摘によってそのことに気づく柔軟な心の動きは、瞳を輝かせる人づくりにかかっているといえよう。

(次号につづく)

大学を飛び出し、活きた地域を「学舎」とする施設が作れないだろうか。その思いから、地域創成研究センターサテライト分室の構想が動き出しました。全国的にみても佐賀大学など、中心市街地にサテライトを設置し、生涯教育講座や大学の広報、学生の教育など様々な活動をしている例はいくつかあります。しかし、平成十六年六月に設置されたばかりの地域創成研究センター（略称RCI）は、愛媛大学初の文系センターということもあり、様々な試行錯誤のなかで一つ一つの事業を行う状況でした。サテライト分室についても、設置後の活用や、人員・資金面など多くの課題がありました。そのようななか、センター長のネットワークにより、中心商店街の大街道に物件がみつかり、また貸し主のご好意によりほぼ無償で十分なスペースを借りることができました。その後は、九月に学生と商店街婦人会の懇談会などの試験的な使用を経て、十一月一日に無事サテライト分室（愛称「mit」）の設置記念式典を行うことが出来ました。愛称の「mit」とは、ドイツ語で「...と一緒に」という意味です。大学が、いままで地域の構成員としてまちづくりに接してきたのであ

地域を「学び舎」に

愛媛大学地域創成研究センター

研究開発担当 吉村 和広



ろうかという自戒の意を込め、地域住民、行政などと大学が「一緒に」まちづくりに取り組んで行くという思いが込められています。また、Matsuyama International Town meeting（松山を拠点に産官学民で一緒にまちづくりを行う）という英語の頭文字ともなっています。

十一月十三日には、「mit」での最初の活動としてサテライト講座「アジアの食と文化―中国を知る―」（共催 留学生センター）を開催しました。この講座は、中国・ネパール・韓国のアジア三カ国の食と文化にスポットを当て、アジアに対する理解を深め、今後の国際交流の促進を図り、留学生には一般の市民との交流

の機会を提供することにより、留学生の日本・愛媛・松山への一層の理解促進を図ることを目的とし開設されました。当日は、市民、学生など二十一名の参加（受講生十八名）のもとに、中国人留学生から中国の地理や歴史などの基礎知識の講義や、中国語講座、文化の紹介などが行われました。参加した皆さんからは講師に対する質問も活発になされ、国際交流への市民の関心の高さが図らずも示される結果となりました。講師を担当した留学生からは、国の紹介をすることで自国の文化を再認識する機会になったという声が聞かれました。

この講座をはじめ「mit」では、まちづくりに関心のある産官学住の構成員が一堂に集い、まちづくりについて情報交換や議論を行う「まち育てフォーラム21」や、地域住民や商店街経営者と教員、学生が協働して中心市街地活性化の諸施策を考える「まち育てワークショップ」、また大学内に既存の地域貢献組織の活動など、様々なまちづくり事業を予定しています。

まちづくりに関心のある方、「mit」で一緒にまちを育ててみませんか？皆さんの参加をお待ちしております。

二〇〇四年十月二十九日、「四国NGOネットワーク」を設立しました。今回、その経緯とともに地域と国際協力の関係についてご紹介したいと思います。

市民活動が注目されるようになった昨今、国際協力の分野においても、今年五十周年を迎えたODA（政府開発援助）の方向性を踏まえ、政府とNGOとの連携や対話が大きく見直されるという新たな時代を迎えています。また、「総合的な学習の時間」の導入により、NGOが学校教育の現場に直接入っていく機会が増え国際理解教育の一役を担うなど、国際協力は市民にとってより身近になってきたといえるでしょう。

このような社会的変化と並行して、地球温暖化や民族間の紛争など、地球規模の課題の解決をめぐり、あらゆる分野、さまざまなレベルで「持続可能な社会」のあり方が模索されています。そして、国際協力活動への市民参加の促進や国際理解教育の普及活動には、こうした課題解決に向けた不可欠かつ重要な要素が含まれており、NGOが担うべき役割として、今後、ますます期待が高まっていくでしょう。

他方、国際協力は「私に関係ない」「わ

地域と国際協力

四国NGOネットワーク

代表 竹内 よし子



かりにくい」と感じている市民の方が沢山いるのも現実です。NGOは、これから地域での市民社会の構築の一端を担うわけですが、その過程で、もともと地域と密接につながりながら、地球規模の社会的公正や、国際協力の必要性が市民に伝わるよう活動の可視化、市民化に向けた努力が必要だと思っています。

ところで、四国に拠点を置くNGO（約三十団体）は、これまで人材・資金・情報の不足など、日々直面するさまざまな活動上の問題に個別に立ち向かいながらも、独自の努力を積み重ね、それぞれの地域に根ざした地道な国際協力活動を展開してきました。しかし、その反面で、NGO同士が相互に連携しNGOの活動基盤を整えていくといった活動にまでは

至らなかったのがこれまでの現状です。

そこで、今回、四国をひとつの地域として捉え、NGO相互の情報交換や意見交換を図り、市民との対話・連携などを通して、NGOの社会的・経済的活動基盤を強化する仕組みをつくらう、地球市民の育成に向けて、行政・企業・学校・異分野NPOとのよりスムーズな連携を図っていく、NGOの側面的支援を行い四国全体のNGO活動のさらなる発展と市民活動全体の推進を図ろう、とNGO関係者が集い「四国NGOネットワーク」を設立したのです。

私自身は、一九九八年に「えひめグローバルネットワーク」を設立して以来、NGO活動に関わってきましたが、今後は、「四国NGOネットワーク」の事務局をえひめグローバルネットワークに置き、四国のNGOの拠点づくりにも取り組んでいきます。そして、これまで四国に点在してきたそれぞれユニークな国際協力NGOの力を結束し、連携によって生まれる新たな魅力を地域の活力に換え、「持続可能な社会」づくりの一役を担っていきたくと願っています。

「四国の皆さん、今後ともどうぞよろしくお願いします！」

ひめ 媛のかわら版

お伊ネさんドイツへ行く

(VOL. 1)



みかん一座

座長 戒田 節子

♪ 交わした友情 ずっと忘れはしない
心に咲いた 清らかな花・・・♪

フィナーレで、日本とドイツの少年・少女達が手をつなぎ、出演者、スタッフ、ひとつになって「ありがとう ダンケシェン」の歌を大合唱。

二〇〇四年十月十六日(土)。ドイツ・ビュルツブルク市(シーボルトの故郷)、マインフランケン劇場で、みかん一座のミュージカル「シーボルトの娘・イネ」の公演が行われ、超満員の会場は熱い想いに包まれました。カオン コールの鳴り止まない拍手の中で、涙を流し、抱き合っているメンバーを見ながら、私は、お伊ネさんがドイツに来るまでの長い年月を思い出していました。

今から百七十年程前、江戸時代の終わり頃。長崎で日本の若者に蘭学と西洋の医学を伝えたシーボルトは、日本の女性、楠本タキと結ばれ、イネが生れま



ドイツ公演のフィナーレで手をつなぐ子供たち

した。その後、シーボルトは、ご禁制の品物を持ち出そうとして幕府からおとがめを受け、日本から追放されました。いわゆるシーボルト事件です。父が去った後、イネが十四歳の時、蘭学と医学の勉強のため、シーボルトの弟子、二宮敬作を頼って愛媛の宇和町に來たのです。その後、イネは、日本で最初の産科の女医になりました。

その史実を元に、イネが宇和で過ごした青春時代を描いたミュージカル「オランダお伊ネ・一番星咲いた」をみかん一座が宇和町と松山市で公演したのが一九九三年。その頃から、毎年、宇和町の青少年がビュルツブルク市でホームステイをするなど、国際交流が深まってきました。

一九九九年、ビュルツブルクで宇和町展が行われ、宇和の方々百人と共にみかん一座のメンバー七人も参加し、郷土芸能などを披露。私はその時、赤い日本髪のかつらに着物・イネの姿で皆さんにお会いし、歓迎していただきました。

二〇〇一年、再び宇和でイネのミュージカルを公演。その時、ビュルツブルクから、シーボルト協会理事長、クライン・ラングナー氏が来日し、客席で見てくださり感動して帰られました。その感動を



ヴェルツブルクの町

ビュルツブルク市誕生千三百年記念で、と依頼されたのが、二〇〇三年の春でした。夢にも思わなかった海外公演のお話に戸惑いました。周囲の

励ましにより、お受けする事にしたのです。「父・シーボルトの故郷におイネさんは行きたかったに違いない。私たちが遙かな時を越えて、おイネさんの魂を連れて行きたい！」そんな熱い思いに駆られました。また、公演をする二〇〇四年は、シーボルトの弟子、二宮敬作、高野長英（ミュージカルの中にも出てきます。）の共に、生誕二百年。みかん一座結成二十年。また、マインフランケン劇場建設二百年・・・と、いろんな節目の年であることにも不思議な縁を感じずにはいられませんでした。おおげさかも知れませんが、神様から与えられた使命のような気がしてなりませんでした。

しかし、愛媛県の劇団が海外で公演するというのは前例のない事。また、ドイ

ツで日本のミュージカル公演は初めてだというお話を聞かされ、震えるような恐ろさと責任で押しつぶされそうになりました。何をどうしていいかわからない。費用もそうとうかかります。そこで、まずは、助成金を受けられるよう資料作りが必要になり、知人の西川デザイン事務所をドイツ公演事務局として開設していただきました。二〇〇三年の十月でした。それから、ドイツ公演という大きな夢に向かって長い苦難が始まりました。

問題は多くありました。まず、役者がいなければ芝居ができません。みかん一座は、プロの集団ではないので、仕事や学校を休まないと遠いドイツに行くことはできません。たった一回の公演のために、最低六日はかかります。職場や学校、家庭に理解してもらえよう必死の努力を始めました。また、今回は時代劇ミュージカルなので、カツラをつけたり、日本髪を結ったり着物を着たり・・・美容師さんや着付けスタッフの協力が必要です。舞台を



ドイツ公演のスタッフ

作るテクニカルスタッフの不安もありました。そこで、現地の劇場を視察に舞台監督の日之西さんと音楽担当の和田さんが、ビュルツブルクに向かったのが二〇〇四年一月。素敵な街並、温かい人達に感激しながらも、青ざめて帰ってきました。というのも、劇場で見た音響・照明設備は日本とあまりにも違っていたのです。日本のスタッフを強化して勉強しないとイケない。そして、大道具の心配もありました。日本で作って送るには、あまりにも大掛かり過ぎて無理がある。設計図を送ってドイツで作ってもらうか・・・？とにかく全てにおいて、難題が山積みされました。その上、言葉の問題があります。何をするにも通訳を介してでないと行えない。前途多難・・・。

その頃、一方では、資金面でみかん一座だけでは抱えきれないと見かねた周りの方々が応援しようとして立ち上がったのだとわかりました。そして、県内の企業人を中心に応援委員会が発足したのが、二月二十九日でした。「日独国際文化交流事業、ドイツ・ビュルツブルク市誕生千三百年記念 みかん一座ミュージカル シーボルトの娘・イネ」は、十月十六日の本番に向けて本格的に動き出したのです。

(次号へつづく)

清水病院正面



丘の上の洋館、というシチュエーションには、様々な想像をかきたてる要素がある。例えばであるが、ある小説の舞台になりそうな気配だったり、深窓の令嬢が住んでいそうなこちら側の勝手な妄想だった。

ともかく、そうした気になる建物の一

“MY TOWN,”うおっちゃんく

歩キ目デス&足ラテス

第30弾

ヴォーリズ現る!?

八幡浜市^{ひづち}日土 清水病院



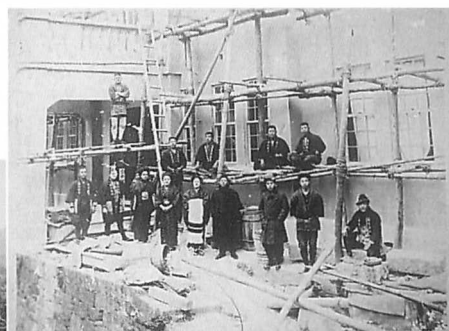
まちなみ探偵団
岡崎 直司

つ、八幡浜市の清水病院にお訪ねしてみた。ここ日土地区は、近くに日土小学校という戦後のモダニズム建築として著名な木造校舎があることで知られる。その学校へと向かう道の右手丘の上に、この病院は建っている。そして、その並びには、長屋門と旧家然とした清水家住宅が垣間見える。全体として、かなり古びた様相を帯びているが、その毅然とした風貌は、ただならぬ歴史性を秘めているからに他ならない。それもそのはず、清水家は、遠く応仁の乱の際に京都から伊予へと下ってきた家柄であるらしい。江戸期には苗字帯刀を許され、庄屋格として宇和島藩内にあっても知られた存在であったようだ。

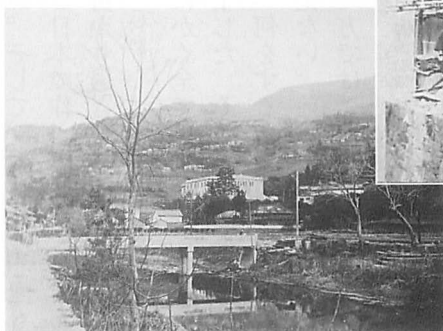
さて、病院の方である。日土川を渡り、坂道を上るにつれ、この地方特有の青石（緑泥片岩）を幾重にも積み重ねた石垣がおおいかぶさるように眼前に迫ってくる。その壁面に沿ってなおも進むと、右奥に長屋門、取って返して鍵折れに階段スロープを上げれば、石垣上にある清水病院の正面玄関である。この車寄せ形式になった玄関ポーチへと続く、洗い出し左官仕上げの階段アプローチは、比較的緩やかな勾配で、まだ自動車交通が一般的でなかった頃に、少しでも訪れる患者

を考えての傾斜と考えられる。この病院の遠景もさることながら、こうして近くで見上げれば、近代の医療施設がこうした地方の片田舎にもたらした貢献度を想像してしまう。当時は、八幡浜町立病院、川之石町立病院くらいしか目だった病院の無かった頃である。

その建築年であるが、ナント今も豊饒と医療を続けておられる大正三年生まれの清水資明先生にお伺いすると、同十二（一九二三）年ではないか、とのこと。

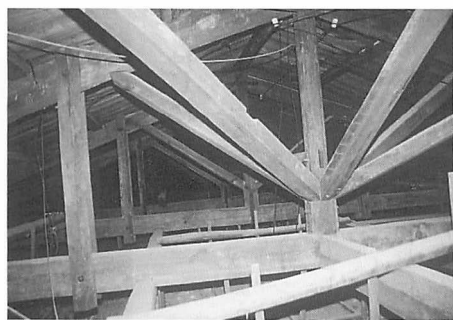


古写真（遠景・工事場風景）



当時の院長は、祖父の弟で眼科医だった仲治郎氏。たまたま、その年の九月一日、新築直後の病院二階で病氣療養中のお父上の部屋に居た資明少年（九歳頃）が、強い揺れを感じ（記憶では震度三くらいとのこと）、それが後日関東大震災であったと分かり、印象の濃い記憶となっておられる。そしてまた驚くのは、この建物の設計が、かのヴォーリズによって成されたものと清水家では伝わっている。だとすれば、愛媛ではまだ確認されている建物は無い。ヴォーリズといえ、少し前、滋賀県の豊郷小学校の保存問題でクローズアップされ、最近富に知られ始めたアメリカ人建築家である。

明治三十八年、キリスト教伝道を目的として二十五歳で来日したウィリアム・メレル・ヴォーリズは、滋賀県の近江八



屋根裏・木造トラス構造



ドクロ飾りのある薬品棚 ※(注)

幡を拠点に、以後八十四歳で亡くなるまで、日本国内に多大な足跡を残した。スタートは英語教師、やがて伝道資金を得るために設計事務所を開設し、豊郷小のみならず、国内で千六百件もの建築を残すこととなる。また、年配者にはお馴染みのメンソレータムで有名な近江兄弟社など、実業家としても才能を発揮、日本人を妻とし、日本人よりも日本人らしいと言われた人物。昭和となり、戦時背景もあって一柳（妻の実家名）米来留という和名に改名帰化したのが、遠く亜米利加からやってきた苦難の人生がその名から思われる。

証拠の棟札でもないかと、お願いして屋根裏に上がらせてもらった。そこは見事な木造トラスの世界だったが、残念ながら見つからず。設計図ほか記録物が無いので、今後の検課課題である。

いずれにしても、清水家では日土教会や日土幼稚園を経営し、明治中期頃、縁戚に当たる宇和の清水伴三郎、末光類太郎あたりが同志社英学校に入学し、親しく新島穰の薫陶を

受けているので、ヴォーリズの関与は充分考えられる。一説には宇和の中町教会を設立した伴三郎の仲立ちとも言われる。勿論、現在の同志社大学の構内にはヴォーリズ設計の建築が多く残っている。資明先生の奥さんのお父上は、大正期に同志社に奉職されていた。

当時の地域にとって、こうした教会・幼稚園・病院などの福祉による感化は、開かれた中央の情報と共に、きっとこの地にさわやかな風を吹かせたことだろう。また、病院通路に掲げられていた板書きに、「入院患者の御方にして夜間若し御容態に患いある時は何時にてもご遠慮なく病室係へ御知らせ下さい。尚ほ看護上其他一般の事に付不行届の点有之時はご遠慮なく御通知下さい」とあり、当たり前のことには違いないが「医は仁術」の時代を彷彿とさせる。レトロな薬局に整然と並べられた医薬品や、老先生の凛とした後姿から、また端正な佇まいの丘の上の病院全体から醸される雰囲気、筆者も心を治療してもらった気がするのであった。

ただただ今年の台風が与えた影響も少なからず、これほど価値の高い建物の治療を考えると、行政なのか住民なのかどこに名医が居ないかとも思うのだった。

注) 上写真の VENENA は劇薬の意

近代化遺産活用フォーラム開催報告

はじめに

近代化遺産とはどのようなものか。この言葉の意味を広く知っていただき、地域に残る大切な資源として保存、活用をしていただくために、(財)えひめ地域政策研究センターでは平成十三年度、十四年度の二年間にわたり、愛媛県からの委託を受けて「近代化遺産総合調査事業」を行いました。近代化遺産とは、幕末から昭和二十年までの日本の近代化を支えてきた建造物であり、世界遺産や重要文化財に準ずる貴重な遺産として、やっとその価値が見直されつつある地域の財産です。

今年は、この広がりにより確実なものとし、今後のまちづくりや地域の活性化



会場風景

に役立てていただくために、近代化遺産の活用を検討するフォーラムを西予市宇和の米博物館(旧宇和町小学校)で十月二日に開催しました。



伊東孝 日本大学教授の
基調講演

価値創造と活用法

基調講演は、愛媛温故紀行の監修をされた伊東孝日本大学理工学部教授にお願いしました。伊東教授は「近代化遺産の価値創造と活用法」について、スライドを交えながら、日本国内から海外までの近代化遺産の活用事例を紹介してくださいました。海外の事例では、「土木遺産の保存や活用は、まち全体の課題としてとらえ、用途にこだわることなく、産業遺産を含め利用できるものはすべて利用することが当たり前になっている。活用についても様々な方法があり、土木遺産や産業遺産を単体で考えるのではなく、他の施設とネットワークして広域的にと

らえる工夫が必要。」とのことでした。また、今回フォーラムの会場となった米博物館も近代化遺産の一つであり、元は小学校の校舎と講堂でした。現在、講堂は、シンポジウム会場や柔剣道の格技場として利用され、また校舎では、百九mもある廊下を利用して雑巾がけレースが行われるなどイベント性も持ち合わせており、活用の成功事例として挙げられました。

最後に「保存・活用」の今後の課題として、これまで古くて汚いものは、取り壊しの対象でしかなかったが、新たな価値の創造により遺産が見直されつつあり、どのように新たな価値を創造していくかが問われているとのことでした。

愛媛の近代化遺産を訪ねて

愛媛温故紀行の編集に携わり、また、本紙「歩キ目デス&足ラテス」でもおなじみの岡崎直司えひめ地域づくり研究会議事務局長に、県内の近代化遺産をスライドでわかりやすく紹介していただきました。

特に愛媛の近代化遺産の特徴として、鉄道では、伊予鉄を始めとする私鉄優位で近代化が進み、国鉄(現在のJR)では全国の県庁所在地で松山が最も遅く開



岡崎直司 えひめ地域づくり
研究会議事務局長

通。予算本線の全線開通は戦時中で、四国西南地域へのアメリカ軍上陸に備えて工事が急ピッチで進められたことなど、地域や時代背景にまつわるエピソードを交えてお話いただきました。

近代化遺産ウォッチング

西予市の近代化遺産ウォッチングの紹介は西予市教育委員会の高木邦宏さんをお願いしました。明治二年に住民が自発的に建てた私塾「申義堂」や明治十五年に建築された「開明学校」、そして、木造三階建の民家など宇和の中心部に残る近代化遺産についてガイドをしていただきました。

もう一つのコースである西山田稚蚕共同飼育場・三瓶隧道は、講師の岡崎事務局長に案内していただきました。どちらのコースにも多くの方が参加され、実際に自分の目で見ることで近代化遺産の価値を実感していただきました。



西予市教育委員会の
高木邦宏さんによる
宇和のまち並み
ウォッチング

まとめ

「近代化遺産と聞いて、どれくらいの人を理解してくれるだろうか。また興味を持ってもらえるだろうか。」と思いながら迎えたフォーラム当日は、西予市だけでなく周辺市町村や松山市から予想を上回る方々に参加いただき、多くの人がまちづくりや近代化遺産に興味を持っていることを改めて感じました。

今回のフォーラムでは当センターが近代化遺産について調査、出版した「愛媛温故紀行」の内容について広く周知できたことだけでなく、近代化遺産の価値を理解し、今後の保存や活用に伴う問題についても学んでいただくことができました。



三瓶隧道の
ウォッチング風景

た。このフォーラムをきっかけに、近代化遺産をはじめ、地域にあるものの価値をもう一度見直し、そのすばらしさや付随する物語を後世に伝えていくことはもちろんのこと、地域おこし、まちおこしの資源として役立てて欲しいと思います。今回のフォーラムでは、多くの方に近代化遺産を知ってもらう必要もあり、近代化遺産の紹介が多くなりましたが、今後は地域を特定して、その地域の身近な近代化遺産を取り上げ、具体的な保存や活用を考えてみたいと思います。

最後になりましたが、このフォーラムは、「ぜひ、近代化遺産である米博物館を会場として使用したい」との思いで、西予市に後援をお願いしました。事前の準備から当日の運営まで協力いただき、本当にありがとうございました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。



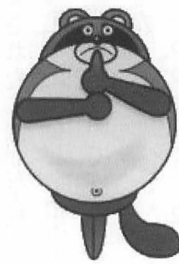
会場となった米博物館の長い廊下
では雑巾がけレースが行われる

伝説のタヌキのまちづくり

研究員 鵜野 大作

プロローグ

喜左衛門狸 (きざえもん たぬき)



狸キヤ
門ジメ
衛メタ
佐イラ
喜イラ

江戸の昔、西条市北条の大気味（おおきみ）神社の境内に数百年を経たホルトの木があり、その木の洞穴に喜左衛門と名乗るタヌキが住んでいました。この喜左衛門は変幻自在の神通力を持っていて、四国狸大番付では、阿波の金長狸と並ぶ西の横綱でした。

あるとき、屋島の禿狸と術比べをして、紀州の殿様の行列に化けると言って本物の行列を見せたところ、禿狸は、「喜左、よく化けたぞ!」と、お籠のそばに近寄っていき、御付の侍に切り殺されてしまいました。

そのうちに、悪戯がすぎて瓦師の窯に投げ込まれ、喜左衛門は焼き殺されてしまいました。その後、悪病が流行ったり、盗人が出たりと様々な被害が出て、里人はタタリと恐れ、大気味神社のお使

いとしてお祭りしました。
タヌキを活かしたまちづくり

伝説・民話の活用について

当センターが今年度のまちづくり活動アシスト事業として助成している喜左衛門狸の会。十月に西条市中央公民館(旧・東予市中央公民館)で第七回日本たぬき学会が開催された。当日は雨にも関わらず、喜左衛門狸の神通力(?)で東京、静岡、愛知、滋賀、兵庫、島根、広島、徳島、香川などから全国のためきファン約二百人が参加した。同会は一九九七年に発足し、生態や民俗などの学術的なものから映画・音楽・料理など風俗的なものといった狸に関することなら何でも発表でき、愛すべきキャラクターである狸を語り、たぬき文化を創造・発信していくこととする組織である。

「町の活性化にタヌキの活用法」と題したフォーラムでは地元、喜左衛門狸の会をはじめ、町の人口よりもタヌキの信楽焼の方が数が多いと言われる滋賀県信楽町(現・甲賀市)、芝居の神として知られる柴右衛門狸を筆頭に八匹の狸を市街地活性化のために活用している兵庫県洲本市、多くの狸伝説が残り狸王国と言われる徳島県からは「平成たぬき合戦ばんぼこ」という映画にも出演した金長狸

の小松島市などのパネリストから地元の産業や民話を活かしたまちづくりについての報告や意見交換が行なわれた。あの手この手と知恵を出し合った内容であったが、聴衆からも次々とタヌキに対する提案がなされ、非常に活発な会となった。また席上で、信楽焼の窯元が制作意欲を示されたこともあって、近々、信楽焼の喜左衛門狸がお目見えする日が楽しみである。

現在、地元では喜左衛門狸のテーマソングが作曲され、きざえもん祭が開催されている。市内のあちこちではイメージキャラクターを使った橋や銅像が登場するまでになったが、伝説のタヌキだけにこれを機会にまた一段と大きく化けるとしよう。



熱く語られるパネルディスカッション

「港の美術館」

リニューアル事業に参加して

研究員 梅村 裕治

清々しい秋晴れの中、長浜町今坊の喜多漁港ふれあい広場において、『第十一回今坊ふれあい祭り』が開催されました。今年は三年振りに「港の美術館」の作品がリニューアルされ、お披露目と表彰式が行われました。この事業には当センタ―が、まちづくり活動アシスト事業として支援していましたので報告します。

知る人ぞ知る、「港の美術館」は今年で十年目を迎え、今回が二度目のリニューアルとなります。この美術館は漁港の防波堤側面をキャンパスにし、その時々テーマに沿った作品が描かれています。（最大縦二・七m横六・〇m）。今年「元氣」というテーマのもと制作者を募集したところ、町内外はもとより県外からも応募があり、家族やグループでキャンペーン気分に参加したり、何日もかけて描き上げた愛好家の方など、空模様をにらみながら思い思いのアイデアと工夫で十六枚の素晴らしい作品が出来上がりました。

「港の美術館」を主催している「今坊ゆ



防波堤の側面を彩る16作品

うやけの会」の津田博幸さんに話を伺ったところ、「この広場でふれあい祭りをを行う際にコンクリート擁壁がとても味気なく感じたため、絵を描いてみてはという話になりスタートした。最初の作品は絵の上からコーティング剤を塗り保存していたが、いつまでも同じ絵では芸が無さ過ぎるので思い切ってリニューアルすることにした。公募と言っても会員の口コミでの募集のため範囲は限られてくるが、パンフレットを持って呼びかけをすることが、自分たちの地域をPRすることにも繋がると感じて三年ごとにリニューアルすることにした。将来、仮に「ふ

れあい祭り」がなくなっても「港の美術館」だけは続けていこうと話し合っている。」とのことでした。

自分たちの暮らしている地域を少しでも良くしたいという思いが、「港の美術館」や、国道沿いのアジサイロードの花づくりにつながり、地道な活動の中から地域への誇りが生まれていることを感じました。自分の地域をPRできる人が多いほど元氣で活力のある地域になると思います。

長浜町今坊におでかけの際は是非、「港の美術館」にお立ち寄り下さい。元氣な作品が皆さんをお待ちしています。



最優秀賞に輝いた愛・女性塾（肱川町）の「うひゃひゃひゃ あははは きゃははは…」

「楽市楽座」で商店街の活性化!

「城下(しろした)楽市を

コーディネート」

研究員 清水 和繁

愛媛のモノづくり集まれ!・・・県下のうまいものをどっさり集めた「城下(しろした)楽市」が、平成十六年十一月三日、松山市のロープウェイ街で城山門前祭にあわせて開かれた。この取り組みは、松山の新しい観光資源を創造するだけでなく、県内の農家や漁業者などの交流拠点づくりをすすめ、松山ロープウェイ街の活性化をはかるというのが狙いで、松山ロープウェイ商店街の依頼を受け、当センターがコーディネートして実現した。

松山ロープウェイ街は、松山市が進める「坂の上の雲」まちづくり構想の中心地で、ロープウェイ駅舎の改築などの事業も進んでいる。商店街も、五年前から城山門前祭りを開催するなど活性化に取り組んでいるが、イベントでは商店街の活性化には結びつかないのが現実だった。このような経過をうけて、高知の朝市のような「市」が立てば商店街の賑わいが増し、県内の農業生産者にもプラスになるとの構想が生まれた。「市」の開設に

あたって、歴史のうえで有名な「楽市楽座」をお手本に、①誰もが楽しいオープンマーケットを目指す(楽市)、②企画・運営はNPO法人「なもし開縁隊」がおこなう(楽座)、③交流市として位置づける、④ロープウェイ街の自主的な手づくり開催、を基本目標に準備実施された。今年、相次ぐ台風の襲来で農作物が被害を受けたため開催が危ぶまれたが、JA関係の直売所や県内の産直施設、生産者グループなど十団体が積極的に参加し、ロープウェイ街を歩行者天国にしてテントを並べ、厳選した農産物などを直接販売した。また楽市には、ストリートライブ(アコースティック楽器演奏)やヨーロッパ的なオープンカフェを併設し、音楽が聞こえくつろげる空間をもたせ、買って楽しい、話をして楽しい、聞いて楽しいを創出し、約三万人の人出で賑わった。

今回の城下(しろした)楽市は、多くの方々から高い評価をいただいたが、NPO法人「なもし開縁隊」開設準備室の門屋哲朗代表は「定期的に市を立てるのが目標。県内各地から生産物を持ち寄り、商店街も生産者も消費者も、情報を発信し吸収する交流市にしたい」とさらに意欲的だ。



オープンカフェ



ストリートライブ



楽市は3万人の人出で賑わった

えひめ地域づくり研究会議フォーラム2005

テーマ 『遺し伝える活動者の集い パートⅡ』

昨年に続き、えひめ地域づくり研究会議では「遺すべきもの、伝えていくべきこと」をテーマに活動しています。今年のフォーラムでは、そうした活動を実践されているグループにお集まりいただき、情報交換・人的交流の場にしたいと考えています。

今回の活動者からの報告では、昨年発表した10団体の中から5団体の方に活動成果や反省点を語っていただき、また、新たに5団体の方にも自分たちの活動をアピールしていただきます。そうした個々のグループの活動・問題点などを意見交換するスタイルのフォーラムです。

ぜひご参加いただき、今後の活動における刺激材料にいただければと思います。

■と き 平成17年1月22日(土)

■と ころ えひめ共済会館(松山市三番町5-13-1)

■プログラム 13:00～ 受付

13:30～ 開会

13:40～ 活動者からの報告Ⅰ「愛媛の遺し伝える活動の現況は」
マイントピアを楽しく育てる(新居浜市)・喜左衛門狸の会
(西条市)・さくら山行会(東温市)・NPO法人アジアフ
ィルムネットワーク(松山市)・石畳を思う会(内子町)

14:45～ 活動者からの報告Ⅱ「愛媛の遺し伝える活動の現況は」
〈昨年報告団体より5団体〉

NPO法人GCM庚申庵倶楽部(松山市)・まつやま文化財
サポートの会(松山市)・おおず赤煉瓦倶楽部(大洲市)・
木霊の学校日土会(八幡浜市)・水ヶ浦「段畑を守ろう会」(宇
和島市)

15:50～ 講演

梅津 章子 氏(文化庁文化財部建造物課)

17:00～ 意見交換

17:30 閉会

18:00～ 交流会

■参 加 費 フォーラム1,000円 交流会5,000円(希望者)

■申し込み えひめ地域づくり研究会議事務局(えひめ地域政策研究センター内)
TEL 089-932-7750 FAX 089-932-7760

E-mail: info@ecpr.or.jp

平成17年1月14日(金)までに

村上水軍博物館 宮窪町

平成16年10月22日、村上水軍博物館がオープン！水軍の歴史を活かした町づくりを進めている、能島水軍の里・越智郡宮窪町に新たな拠点が生まれました。

博物館のメインは、村上水軍の歴史世界を分かりやすく展示している展示室（2階）です。実物大のジオラマや映像コーナーもあります。そしてヨロイの着付けなどができ、わくわく体験ルーム（2階）や、国史跡の能島城跡などの眺めが抜群の展望室（3階）など、初めての方でも過ごしやすい施設になっています。

また、ミュージアムショップ（1階）では村上水軍グッズや宮窪町の特産品などのお土産を買うことができます。しまなみ海道の美しい景色と水軍の歴史ロマンを体感しに、ぜひお越し下さい。



開館時間：午前9時～午後5時

（入館は午後4時30分まで）

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日休）

年末年始（12/29～1/3）

観覧料：大人－200円、中学生以下－無料
65歳以上・身体障害者－無料

（2005年1月16日（今治市合併）以降は2割引）

問い合わせ：村上水軍博物館

TEL 0897-74-1065

E-mail: kyoiku@town.miyakubo.ehime.jp

HP: <http://www.town.miyakubo.ehime.jp/benri/gyouji/kyoiku02.html>

編集後記

「君たちの仕事は、地域で頑張っている人たちをステージへ押し上げてあげることだ。」先日、仕事で愛媛大学を訪れた折に、教育学部の讃岐孝治先生からいただいた言葉です。

今回は特集テーマが大きかっただけに、名の通った方に偏ってしまったくらいはありますが、当センターの仕事、特に舞たうんの編集では、この気持ちを大切にしていきたいと思っています。地域で元気に頑張っている方々の情報をお寄せください。（あ）

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

（財）えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動スタッフ

TEL 089(932)7750

FAX 089(932)7760

発行／平成十七年一月一日

（財）えひめ地域政策

研究センター

印刷／三創印刷株式会社